



Title	昭和四年の全集〈合戦〉：探偵小説と円本
Author(s)	成田，大典
Citation	国語国文研究，128，45-64
Issue Date	2005-08-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93563
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_128-45-64.pdf



昭和四年の全集〈合戦〉

探偵小説と円本

成 田 大 典

【一】円本ブームと探偵小説

大正一五年一月二十九日、ある広告記事が『朝日新聞』の第一面を飾った。「現代日本文学全集批判」という大文字の見出しが目につくが、これは刊行が目前に迫った全集の宣伝であり、批判という文言も、ここでは否定的な言辭ではなく批評判定という意味合いで使われている。実際、中身を見てみると法学博士、子爵、著名作家など名士による推薦の辭が述べられている。翌一二月より改造社から刊行されたこの「現代日本文学全集」が、所謂円本と呼ばれる予約制廉価版全集の嚆矢となり、またこの全集が記録的な成功を見せたため、多くの出版社が追隨し、同一方式の全集を企画したことはよく知られている。これらの多くは最初に一円の予約金を取り、それを最終回配本の代金に充てるという予約制度を取っていたが、一円というのは当時の書籍としては、従来の半分程度の値段で、それに

三、四冊分の量が収められていたのであり、当時としては価格破壊的な円本は、大量の生産、伝達、消費、また出版社による派手な広告宣伝、販売、或いは読者層の広がり、書籍の大衆化という様に、書籍や出版の近代化という点において、大きな足跡を残した。

一方、この改造社の広告が紙面を賑わせているのとはほぼ同時に、探偵小説の分野においても一つの動きがあった。江戸川乱歩が『朝日新聞』に「一寸法師」を連載したのである。この作品は大正から昭和への移行を挟む形で、大正一五（一九二六）年一月八日から翌昭和二（一九二七）年二月二〇日にかけて掲載された。探偵小説が新聞、特に当時一〇〇万部を越えていた東西の『朝日新聞』という巨大メディアに掲載されるという点において、この作品は大きな意味を持つが、この頃から徐々に探偵小説も人口に膾炙してゆくことになる。無論、探偵小説という言葉や、犯罪・事件などに主眼をおいた作品は明治時代から既にあり、大正時代にも谷崎潤一郎や芥川龍之介などによってしばしば書かれていた。しかし、それがある

程度まとまった運動になるのは大正後期、西暦にして主に一九二〇年代という時期である。大正九（一九二〇）年一月号が雑誌『新青年』の創刊号だが、この『新青年』を中心にして戦前、特に二〇年代は探偵小説作品が発表されてゆく。『新青年』は海外の作品を多数翻訳して探偵小説を紹介していったが、そのような中で大正一二（一九二二）年に江戸川乱歩が登場する。この乱歩が精力的に作品を発表していく中、懸賞小説などにより、他の書き手も徐々に出てくる。また短命なものが多かったが、探偵小説を中心とした雑誌も幾つか刊行され、やはり同時期に発展した大衆文学と微妙な絡みを見せてゆく。或いは昭和三（一九二八）年に発表された江戸川乱歩の「陰獣」は、掲載された『新青年』が三刷りになるほどで、新聞上などでも評されるなど非常な人気を博した。

この様に、探偵小説が雑誌『新青年』を中心としながらもそこに収まりきらず、徐々にその人気を拡大してゆくのとほぼ同時期に起こったのが、円本ブームと呼ばれる状況であったのである。

【二】探偵小説の円本

探偵小説に関する円本の嚆矢は、平凡社が昭和二年四月から刊行した「現代大衆文学全集」である。この企画は国内の大衆文学作品を集めたものだったが、全六〇巻のうち、探偵小説関係は一〇冊程収められていた。また、翌昭和三年二月からは改造社の「世界大衆文学全集」が出版される。海外作品の翻訳を取めた全八〇巻の内、探偵小説関係は二〇冊程度であった。この様に、昭和二年から三年

にかけて、探偵小説は円本全集に含まれる様になるのだが、それは「大衆文学」ジャンル内の一分野という性格を担ったものであった。「現代日本文学全集」を皮切りとした円本は、雲霞の如く陸続と企画、刊行され、数年間出版市場を席卷する。そして永嶺重敏が「円本ブームは昭和四年に転機をむかえた。翌昭和五年以降円本ブームは急速に終息していく。」と述べている様に、昭和四（一九二九）年に円本ブームは一段落し、新たな展開を見せる。この一九二〇年代の最後の年に、探偵小説の全集が相次いで出されることになる。すなわち平凡社の「ルパン全集」を皮切りに四つの出版社から、左の様に六種類の全集本が刊行されたのである。

全集名	出版社	刊行開始	冊数	配本数	定価	編集者・責任者
ルパン全集	平凡社	昭和四・四	一二巻	一冊	五〇銭	
小酒井不木全集	改造社	昭和四・五	一七巻	一冊	一円	岡戸武平
日本探偵小説全集	改造社	昭和四・五	二〇巻	二冊	五〇銭	
世界探偵小説全集	博文館	昭和四・五	二四巻	二冊	五〇銭	『新青年』
探偵小説全集	春陽堂	昭和四・六	二四巻	二冊	五〇銭	甲賀三郎 平林初之輔
世界探偵小説全集	平凡社	昭和四・六	二〇巻	一冊	五〇銭	直木三十五

これらの全集は、いずれも「探偵小説」の全集として売られたのであるが、⁽⁴⁾このうち「ルパン全集」を除く五つは、予約期間もほぼ重なっており、⁽⁵⁾それゆえ同じ時期に広告が載せられることになった。この様に「探偵小説」を冠する全集が出されたこと、それは探偵小説の概念がそれまでにある程度認知されていたということであり、

同時に全集を出す程の分量も揃っていると考えられていたということでもある。或いはこれらの全集が刊行され、探偵小説が体系化、カテゴリー化されたことで、ジャンルとして恰も自明のものだと広く示されたと言えるかもしれない。即ちこれら全集の刊行は、独立した一つのジャンルとしての確立という点で、探偵小説の一つの成果と捉えることが出来るのではないか。

近年、円本に関しては実証的な研究が精力的に進められているが、本論の目的は探偵小説と円本とのかかわりを見てゆくことにある。探偵小説史の文脈において、従来この円本全集ブームは探偵小説の流行の根拠として捉えられてきた。だが、その際問題とされるのは複数の全集が同時期に出たという事実のみであり、実際の内容に則した検証は殆どなされていない。先述した様に、円本による全集ブームとは大量生産、流通、消費という、商品としての書籍の近代化を決定づけた出来事である。また円本全集の多くが予約制というシステムを取ったということを考えれば、大量の読者の予約を獲得するために、魅力的に広告するということは必要不可欠なことであろう。そうであるならば、この円本全集の内実を知るためには、それらがいかに広告されたのかという側面から見てゆく必要があるだろう。そのため本論では、『朝日新聞』上で掲載された探偵小説の全集の広告を中心に見てゆきたい。なぜなら『朝日新聞』はこの時期東西あわせて一〇〇万部を越す、非常に巨大で「大衆的」なメディアであり、その意味で円本全集の読者層と重なるところが大きいからである。そうであるならば、新聞での広告とは探偵小説の枠が新聞読者や円本読者という「大衆」に明示されるということでもあった。後

述する様にこれらの全集は探偵小説ジャンルの活性化という点で功を奏したのであり、本論でもそういった状況を見て行くに当たって、広告媒体を中心にして作り手側の思惑を探ってゆきたい。

なお本論で扱う探偵小説全集はどれも一冊五〇銭のものである。それは「円本が一通り行渡ってしまったので、この上、大量の読者を得るためには、更らに廉価な本を出す外はなかった。」⁽⁶⁾という様な事情によるものである。そのため厳密な意味でこれらは「円本」と言えない。確かに大きさや値段に目を向けると、従来の円本が一冊一円でB5サイズであったのに対して、これらの探偵小説全集は半額の一冊五〇銭、大きさも半分の文庫サイズという相違はある。だが、これら全集企画の多くは一回に二冊配本であり、すなわち毎月一円ずつを支払うという特性は従来の円本と変わりはない。加えて、何よりもその流通形態が円本を踏襲したものである。この様に、これら探偵小説全集が円本ブームの流れの中で出てきたという性格上、円本の変種と考えるのが妥当であり、それ故本論の中でも円本という言葉を使用する。

【三】同時期の探偵小説全集

先にも述べた様に、この昭和四年という年には「探偵小説」をタイトルに含んだ全集が同時期に複数出版された。従来の捉え方では、これらの全集はそれぞれが独立して企画され、思いもかけず競合したという見方が一般的である。江戸川乱歩の「まさか四社の競争になろうとは思わなかったのであろうが、夫々計画が熟してしまつて

いたので、他社の発表を見て、自社の計画を引込めるといふわけにも行かず、結局全部が出版され、案じたほどのこともなく夫々成功を収めた。⁽⁷⁾や中島河太郎の「全集流行は次第に群雄割拠の様相を呈して、同様な企画がかちあうことになった。小説界の寵児となっていた探偵小説に、各社が殺到したあげく、とうとう同時期に四種刊行という激突ぶりであった。」⁽⁸⁾という言からもそのことを窺うことが出来る。

当時の新聞を見てみると、この時期夥しい数の探偵小説の全集広告を目にする。例えば五月二三日の新聞の第一面を見ると、上半分は改造社の「日本探偵小説全集」と「小酒井不木全集」の広告で、下半分もそのうち半分を春陽堂の「探偵小説全集」の広告が掲載されている。すなわち第一面の頁全体の四分の三が探偵小説全集の広告で占められているのであって、非常に目立つ構成になっている。

そして同日の五面には今度は平凡社版の広告がやはり頁全体の三分の一度の大きさで掲載されている。つまり読者は一面で大きな「探偵小説全集」の文字を見た後、二回めくるとやはり同様の広告を目にすることになるのである。七月五日は特に甚だしく、一面、三面、五面、七面で探偵小説全集や探偵小説に関する巨大な文字が看取することが出来る(資料①参照)。すなわち第一面では春陽堂の「探偵小説全集」と、「探偵小説傑作集」を見出しにした雑誌「朝日」⁽⁹⁾が全体の八割程を占有し、第三面では下段三分の一が平凡社の「世界探偵小説全集」の広告となっている。第五面には真ん中半分を占める形で雑誌「講談倶楽部」の広告が載っているが、その中の最大の見出しになっているのは乱歩の「蜘蛛男」で、「江戸川乱歩先生名作発

表! 奇々怪々! 素敵に面白い大探偵小説」と宣伝されており、更に七面にも博文館の「世界探偵小説全集」の広告が載せられている。つまりこの日の新聞の左側面には、連続して四回探偵小説関係の広告が掲載されているのであり、めくつてもめくつても「探偵小説」の名前を目にすることになるのである。この様に連続した巨大な広告を目にした新聞の読者は探偵小説という言葉をやでも意識せざるを得ないのではないか。新聞の一面に探偵小説全集の広告が来ているのは、今触れた五月二三日、七月五日だけではない。全集の広告が掲載され始めた五月一日から、予約締切である七月五日の約五〇日間の間に、朝刊の第一面に全集広告が来たのは八日間である。すなわち約六日に一度の割合で新聞の最も目につく箇所⁽¹⁰⁾に広告が載せられたことになる。

それでは第一面に限らず、新聞内に載せられた広告の数という点ではどうだろうか、この期間における全集の広告数は、博文館が七回、平凡社、改造社、春陽堂がそれぞれ八回ずつである。またその他にも「新青年」など探偵小説関係の広告も七回載っている。後述するが、博文館の全集は雑誌「新青年」の編集によるものであり、それ故「新青年」と全集は色々な形で連動している。実際、新聞に掲載された「新青年」の広告中でも全集の宣伝がなされている。つまり五〇日間の間に全集関係だけで三一回、それ以外も含めると三八回も探偵小説の広告を目にすることになるのであり、しかも先述した様にそれらの広告はいずれも二段、三段分の分量の、非常に巨大なものである。この様にこの時期新聞上では「探偵小説」が氾濫していたのであり、江戸川乱歩はこの状況を「探偵小説時代の観

があった⁽¹⁰⁾と述べている。もちろん乱歩のこの言葉は、探偵小説の実作者・関係者として特に敏感だったという事情もあっただろう。だがそのことを差し引いても、日々繰り返して非常に目立つ広告を目にする新聞読者は、程度の差はあれ、確かに探偵小説というものを意識することになったであろうと思われる。

では出版社は自社の全集をそれぞれの様に宣伝したのか、すなわちどういった点を売りとしたのであろうか。各社の特徴を簡単に説明すると次の様になる。まず改造社「日本探偵小説全集」は日本人作家のみの内容だが、我国の撰まれたる探偵小説は海外探偵文学の壘摩しつつある。見よ、我全権威の傑作の一大集成を。我国の名作丈け我等にビタリする。」という様に、日本人読者には日本人作家による探偵小説作品が適していると述べる。博文館「世界探偵小説全集」の場合は、逆に海外作品ばかりを集めているのだが、先に少し述べた様に自社の雑誌「新青年」との連動を強調する。それは探偵小説というジャンルを「新青年」がそれまで主導的に牽引、開拓してきたという自負に裏打ちされたものであった。春陽堂「探偵小説全集」の場合は、日本と海外作品の折衷式になっているが、「東西探偵小説界の精鋭総出陣!! 待ちに待たれた探偵小説全集は是だ。東西を尽した陣容の立派な装幀口画と共に眼を奪わずんばやまざるべし。」とか「世界及日本の代表作家を悉く収たる一大壮観!!」という様に国内、国外の両方を含む点を強調している。最後に平凡社の「世界探偵小説全集」の場合は、海外作品のみを収載しているが、その際人気作品本位という点、そして経済的側面を強く宣伝しているのである(この点に関しては後述する)。本論ではこの内の、博文館

「世界探偵小説全集」と平凡社「世界探偵小説全集」に話題を絞ってみてゆきたい。なぜなら全く同一のタイトルを持つこの二つの全集を見比べてゆくと、様々な点で重なりつつも差異化され、その結果各々の付加価値を高めていることが浮かび上がってくるのであり、それ故比較対象として好材料と思われるからである(両全集の構成は資料②を参照)。

【四】二つの「世界探偵小説全集」

ではこの二つの全集はどの様に評価されてきたのであろうか。先に述べた様に、この円本全集に関しては従来、競合したという事実のみが取り上げられ、実際の中身について触れられた文章自体が少ない。そして僅かに書かれた記述を見てゆくならば、博文館の全集は質が高く、一方の平凡社はそれに比べて劣るものであったという見方がなされている。例えば博文館の全集に関して中島河太郎は「他の同種の全集が即席の編集であったのに対し、作品も訳者も長年の節にかけられたものであった。(略)史的展望による編集方針の確立に合わせて、日本人読者の好尚を反映しているのが興味をそそる。」

(略)博文館版はその精選された内容、典雅な装幀、唯一の解説つきという三拍子揃いで、ひとときわびきん出た成果であった⁽¹²⁾。」と述べ、一方平凡社のものに関しては、「編集は大ざっぱなものだった。後に大衆作家として盛名を馳せた直木三十五の立案で、二十巻のうち六巻をドイルに当てるといふ思い切ったやり方の反面、凡作をいくつも並べているし、まず訳者に文壇人の名を列ねたが、名を貸しただ

尾佐竹猛著

幕末遣外使節物語

乃木將軍

新選組遺聞

野茶栽培調理

人間不滅

萬里閣書房

第1面

世界探偵小説全集

平凡社

即刻!

申込金なしです。最寄の書店へト、五十銭だけお持ちになれば、何の手数もなく右から左へ資料が勝手に送ります。同時に余計な強迫も成立します。

要金込申

チリングクロス事件
夜魔の恐怖
大盗天竺
地下鉄サム
怪盗五右衛門
盗品切の首は直本社へ!

一冊50銭

本切日

平凡社

第3面

小説読むなら講談倶楽部!!!
八月號隔から隔までトモ面白く大評判の傑作ぞろひ!!

江戸川乱歩先生名作發表!
奇々怪々素敵に面白い大探偵小説

蜘蛛男
美人の行方不明!謎の大犯罪!

奇怪!男裝の王女
天城山上美人の首
巨人マゴドナルド
血に咽ぶ海賊小唄
松旭齋天勝の半生
美人麗人
家庭團圓!
笑ひの夕
天晴競べ

人氣俳優劇大場面比べ
大熱狂の戀愛小説!
王冠
會心の大力作

印度洋上決死の大試合 嘉納治五郎結婚當時の思ひ出はなし 六名家執筆
金儲け秘傳極意又々公開!!
岡辰大福帳 谷孫六

右の讀物講談倶楽部八月號はあれも講談倶楽部にあります
左の讀物講談倶楽部八月號はあれも講談倶楽部にあります

第5面

断然壓倒!!
最高の大部數を獲得す
申込續々殺到!!
急遽大増刷の大盛況!!

世界探偵小説全集

最新版
全集

本配回三第	本配回二第	本配回一第
毎下月七	中名配下目	実出配増大
(15) 江戸川乱歩集	(16) オープンハム集	(17) ドイル集
心理小説 探偵小説	地獄小説 探偵小説	探偵小説 探偵小説
(18) マツカリ集	(19) ルブラン集	(20) ドウーゼ集
心理小説 探偵小説	探偵小説 探偵小説	探偵小説 探偵小説

第7面

いずれも三段抜き以上の大きさで、頁内で非常に目立つ構成になっている。

資料②「世界探偵小説全集」構成

博文館「世界探偵小説全集」(全 24 巻)	平凡社「世界探偵小説全集」(全 20 巻)
①古典探偵小説集付「古典犯罪探偵小説史」、 「ポオ以降現代まで」(田内長太郎、田中早苗編) ②エドガア・ボウ集 (平林初之輔訳) ③ガボリオ集付「バルザック集」(田中早苗訳) ④ボアゴベイ集 ※XYZ 解説(妹尾韶夫訳) ⑤コリンズ集付「オモニア集」(森下雨村訳) ⑥ヒュウム集付「英米七人集」(横溝正史訳) ⑦ドイル集 (延原謙訳) ⑧モリスン集付「ポール・ソーン集」(延原謙訳) ⑨グリーン集 (安田専一訳) ⑩ルルウ集付「ルノウ集」(水谷準訳) ⑪クリステイ集 (延原謙訳) ⑫フイマン集付「ハンショウ集」(妹尾韶夫訳) ⑬ドワーゼ集 ※森下雨村解説(小酒井不木訳) ⑭ルブラン集 ※解説星野辰男名義(保篠龍緒訳) ⑮フレッチャ集 (森下雨村訳) ⑯オツペンハイム集付「ル・キュー集」 (森下雨村訳) ⑰チェスタートン集 (浅野玄府訳) ⑱ウォーレス集付「ホーナング集」 (延原謙、田中早苗訳) ⑲ビーストン集 (妹尾韶夫訳) ⑳マシヤール集付「ルヴエル集」 (田中早苗訳、水谷準訳) ㉑オルチイ集 (上塚貞雄訳) ㉒マツカリ集付「ランドン集」 ※延原謙解説(坂本義雄訳) ㉓江戸川乱歩集 ㉔ヴァン・ダイン集付「デヴィス集」 ※江戸川乱歩解説(平林初之輔訳)	①恐怖の谷、怪犬 (コナン・ドイル作、江戸川乱歩訳) ②ホルムズの冒険 (コナン・ドイル作、江戸川乱歩訳) ③ホルムズの記憶 (コナン・ドイル作、三上於菟吉訳) ④ホルムズの帰還 (コナン・ドイル作、三上於菟吉訳) ⑤あるグロテスク (コナン・ドイル作、東健而訳) ⑥ホルムズの事件簿 (コナン・ドイル作、延原謙訳) ⑦地下鉄サム (マツカレイ作、横溝正史訳) ※付「決闘家倶楽部 外二篇」(ビイストン作) ⑧夜の冒険 (ドウゼ作、小酒井不木訳) ※付「孔雀の樹」(チェスタートン作) ⑨ブラウン奇譚 (チェスタートン作、直木三十五訳) ⑩チャリングクロス事件 (フレッチャー作、和気律次郎訳) ⑪オペラ座の怪 (ルルー作、田中早苗訳) ⑫影の人 (ウォーレス作、直木三十五訳) ⑬鉄槌／叛逆者の門 (ウォーレス作、松本泰訳) ⑭幽霊 (オツペンハイム作、和気律次郎訳) ⑮夜の恐怖／泰西大盗物語 (ゴーク作、大佛次郎訳) ⑯男装女装／謎の扉 (フリーマン作、邦枝完二訳) ⑰猫眼石 (フリーマン作、近藤経一訳) ⑱アクロイド殺し (クリステイ作、松本恵子訳) ※付「クラバムの料理女 外二篇」 ⑲カナリヤ殺人事件 (バンダイン作、平林初之輔訳) ⑳ペンスン殺人事件 (バンダイン作、松本正雄訳) ※広告表記は「ペンスンの殺人」(平林初之輔訳)となっている。
・同一の単行本の中でも濁点、棒、小文字などの表記が統一されていないため、タイトル及び作者の名前の表記などは、基本的に目次のものを使用した。 ・解説付き(特に記載がない場合は訳者と同じ人物に拠る)。	・同一の単行本の中でも濁点、棒、小文字などの表記が統一されていないため、タイトル及び作者の名前の表記などは、基本的に中表紙のものを使用した。また複数の巻に収められている作家名などで、表記が違う場合は誤解を避けるために統一した。

けにすぎず、下請けの代訳者の拙速の産物だった。」と評価は低い。中島のこの見方は、江戸川乱歩の「これは直木三十五君の立案で平凡社に持ちこみ、一種翻訳工場式なやり方で、直木君の企業としてやったものようであった」という述懐を基にしていると思われる。だが果たして両者に対するこの様な評価が妥当なものと言い切ることは出来るのだろうか。例えば中島は博文館のものを「ひとときわ抜きん出た成果」と評し、その判断材料としては「精選された内容、典雅な装幀、唯一の解説つき」の三点を挙げている。だが両者のものを見てゆくと、判型など外見面ではほぼ同様で殆ど差異はなく、また本の構成や装幀などにも質的に明らかな優劣を見出すことは出来ない。或いはこの両者を含めた各社の探偵小説全集の全てが、同様の体裁をとっているのである（更に言えば、そもそもこの時期の円本のほぼ全てに共通している特性なのである）。それ故に、中島の「典雅な装幀」という評価などは、博文館の『新青年』神話の強迫的呪縛に囚われているところが大きいと言えよう。それ故全集の構成や広告状況など、実際に即した検証が必要となるのであり、そこから二つの全集の新たな面が見えてくる。

まずは両者の比較を新聞上の広告を通して行いたい（資料③参照）。一連の全集の中で、最初に広告が出たのが博文館の「世界探偵小説全集」で五月一日の夕刊のことであった（広告右）。ここでは「世界探偵小説全集」というタイトルと共に「詳細近日発表!!!」と書かれ、具体的な構成や内容については一切触れられていない。そして翌一六日の朝刊で三段抜きの大きな広告が載せられる（広告左）。この広告では「世界探偵小説全集」という黒抜きの目立つ文字の横

資料③「世界探偵小説全集」広告（『東京朝日新聞』）



世界探偵小説全集

探偵興味時代来る!

平凡社

東京
麹町
総代理店
電話 九九三九

20 読み初めたら面白く
止められぬ! 探偵
小説は世界読書界の
先端的流行だ!

19 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

18 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

17 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

16 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

15 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

14 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

13 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

12 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

11 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

10 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

9 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

8 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

7 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

6 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

5 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

4 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

3 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

2 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

1 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

5月16日（朝刊）

新青年 編輯部責任編集 岡田繁

世界探偵小説全集

探偵興味時代来る!

平凡社

東京
麹町
総代理店
電話 九九三九

20 読み初めたら面白く
止められぬ! 探偵
小説は世界読書界の
先端的流行だ!

19 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

18 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

17 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

16 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

15 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

14 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

13 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

12 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

11 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

10 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

9 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

8 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

7 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

6 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

5 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

4 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

3 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

2 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

1 探偵小説の殿堂 新青年は創刊
十周年を記念して天下にこの
快報を発表す 詳細近日発表!!!

5月15日
（夕刊）

に「探偵興味時代来る！」という文句とともに、全集の構成が明らかにされており、一見すると前夜の広告の続きに思われる。しかしよく見ると二つの広告は実は別々の全集のものなのである。つまり前日夕刊のものは博文館、その翌日朝刊の広告は平凡社の全集なのであり、すなわち「世界探偵小説全集」という二つの同じ名前の全集の広告が相次いで載せられたことになる。しかも「詳細近日発表!!!」と書かれた夕刊の翌朝に別の「世界探偵小説全集」が詳細を発表するという事態が起きているのである。その上翌朝の平凡社の場合は、連絡先や「内容見本贈呈」を載せ、既に注文に応じる準備に至っているのである。ここから、例えば前日の夕刊で「世界探偵小説全集」の刊行を知って興味を覚えた人物が、翌朝に同じタイトルの全集広告を見付けて、前日のものと混同し、注文するという状況が起きた可能性のあることは十分に推測され得る。

無論並べてよく見ると、両者の違いは明らかである。だが、それはあくまで並べて見た場合であり、前日の夕刊と翌朝刊の広告を並べて比較するということは、通常の新聞読者には考えにくい。また博文館のものは『新青年』主導による編集ということを強く押し出しているが、それに比して博文館という社名は非常に小さく殆ど目に入らない程度でしかない。相当な探偵小説ファンや『新青年』読者でもなければ『新青年』と博文館とは容易に結びつくわけではないだろうから、こういった広告では探偵小説全集の発行はアピールできても、発行会社を強く記憶させにくい。勿論、前日の夕刊と翌日の朝刊という、時差の僅少さを考えるならば、これは平凡社が狙ったことではないだろう。だが偶然とはいえ、同タイトルの全集が僅

かな時間差で広告されることで、しかも広告の内容も連続するかの様なものだったことで、奇しくも博文館が平凡社の全集広告に協力する形になってしまったのである。この出来事は、偶然とは言え対抗会社による協力という点で興味深い。

この様に、その端緒から面白い様相を呈した探偵小説全集の広告は、他の二社も巻き込み、日々激しさを増してゆく。企画が重なっている以上、他社のものを意識せざるを得ないであろうが、そのことは広告上の文字からも見て取ることが出来る。例えば当初の広告は自社の宣伝のみに終始していたのだが、そのうち他の全集との比較的な文言が目につく様になってくる。

「平凡社版が一番よく売れる」と書店で評判」

(平、六月一〇日、一五日)

「御申込のとき春陽堂の探偵と御指定を」

(春、六月一二日)

「断然压倒!! 各地書店申込部数第一位」

(博、六月二四日)

「壇上のコナンドイル脚曰く 探偵物なら春陽堂版」

(春、六月二七日)

「平凡社版が人気第一!!」

(平、六月三〇日)

「断然压倒!! 最高の大部数を獲得す。」

(博、七月五日)

こういった文句は、明らかに企画が重なっていることへの意識⁽¹⁾と取ることが出来る。

【五】博文館の戦略

ではその中でも特に企画の重なっている二つの「世界探偵小説全集」は、それぞれどのような点を売り出しているのだろうか。まず博文館だが、この会社の場合は、先にも述べた様に、『新青年』が責任編集しているということを盛んに強調している。前章で挙げた五月一日の広告でも「『新青年』編輯部責任編集」として「探偵小説の殿堂は創刊十周年を記念して、天下にこの快挙を発表す」と述べており、予約期間内の広告を散見してゆくと、この傾向は一層顕著に見えてくる。博文館の広告では、「世界探偵小説全集」の前に必ず「新青年版」という文字を冠している。先に述べた様に、この「新青年」が目立つ形になっているのに比べて、博文館という社名は驚くほど小さく目立たない。すなわち博文館の全集では、社名よりも『新青年』という雑誌名の方をより強固に打ち出しているのである。その様な特徴は他にも多く見受けられる。五月二十九日には「探偵文学の濫觴より年代と傾向を逐ふて完璧を期せる世界探偵小説の定本！作家と作品の選択に、又訳者の選定に先づ本全集の絶対的価値を見よ！！」と誇らしげに書かれているが、その横で、「責任編集の意味／『新青年』編輯部」として長文の宣伝が載せられており、探偵小説に関する『新青年』の自負が力強く語られている。それは他の日の広告にも見ることが出来る。またそれに合わせて名士のコメントも併載している。六月三日には元『新青年』編集長の森下雨村の他、大下宇陀児、加藤武雄、江戸川乱歩、三上於菟吉のコメント、同じく

六月五日には長谷川天溪、佐藤春夫、平林初之輔、浜尾四郎、馬場孤蝶、高田義一郎が全集推薦の辞を寄せているが、そこでは何れも『新青年』への賛辞が述べられているのである。

また雑誌『新青年』自体においても全集と連動する動きが様々に見られる。例えばこの期間の『新青年』誌上では、毎号で見開き二頁分の全集の広告が載せられ、また編集後記でも「本号では全集に顔を並べた人気作家の快作を集めてみた。」（昭四・夏増刊）と書かれている様に、雑誌と全集の両者は密接に結びついていたのである。また『新青年』昭和四年九月号には江戸川乱歩「探偵作家楽屋ばなし」が掲載されているが、この回顧的随想は完結せずに途中で終わっている。そして最後に「以下、この興味深い「楽屋ばなし」は新青年版世界探偵小説全集第三回配本「江戸川乱歩集」に発表。」と宣伝して「新青年」読者に対して全集購入の欲望が湧くような企画もしている。⁽¹⁵⁾

それではその様に『新青年』を積極的に打ち出した全集の中身はいかなるものであったのだろうか。森下雨村は『新青年』昭和四年七月号に「世界探偵小説全集」について「一文を載せている。これは見開き二頁の大々たるものだが、そこには以下の様に書かれている。

古典作家から現代作家までを体系的に選び出した本当の意味の世界探偵小説叢書、或は全集なるものは、英米仏獨のいづれを搜しても、現在ではまだ出てゐないのである。（略）今度の世界探偵小説全集に附した「新青年編集部責任編集」の保証的言

明は、即ちこの難事件を十分の自信を以て完ふし得る確信がついたからである。言葉を換へれば、創刊以来十年、海外探偵小説の紹介に努め来つた新青年にして、始めてこの大任に当り得るとの自負と自任とによつて、十週年記念の出版としてこの計画は成つたのである。

ここから窺えるのは、歴史性を強調した全集の編纂方式と、それを裏打ちする『新青年』ブランドに対する自負である。実際に全巻の構成を見てみると、第一巻が近代以前の探偵譚、裁判ものなどを収めた「古典探偵小説集」で、その後、ポーやガポリオ、ドイルなどを経て、現代の乱歩、ヴァン・ダインまで、基本的には編年的に列べられている。この様な歴史性を強調した考えは、先に見た新聞広告の中でも盛んに強調されており、そして名士達の推薦の辞もまた歴史性と『新青年』に対する讃辞であつた。⁽¹⁶⁾ こういった広告が新聞上でなされるということは、『新青年』読者層以外に対して、『新青年』が探偵小説の「本家」であるということをアピールすることにもなると言えるだろう。すなわち『新青年』を表に出すという博文館のやり方は、探偵小説全集と『新青年』とがお互いに補強し合うという効果を生み出したと言えるのである。

またこの全集の中には、日本人作家として唯一江戸川乱歩が収録されている。これはすなわち、乱歩のみは世界的に見ても、他に収録されている海外作家達に伍するものであるということであり、実際に乱歩自身も六月三日の新聞広告で「本全集中に日本探偵作家として私一人が加へられたことは何とも光栄の至りである。」とコメント

している。

以上これまで見てきた様に、博文館版の全集においては、歴史的な構成をとりその中に江戸川乱歩を含めることによつて、『新青年』自身による「探偵小説史」の形成と、そこへの江戸川乱歩の位置づけ、すなわち乱歩の正典化が行われたと言える。そして探偵小説「本家」という性格を強固に打ち出し、それを新聞読者という「大衆」にアピールしたのである。尤もそれまでも『新青年』においては、翻訳作品や評論等によつて、海外の探偵小説事情や歴史が紹介されており、また乱歩を花形的に扱う言説もしばしば見られる。だがそれはあくまで雑誌内という限定されたところに留まつており、この円本全集によつて探偵小説の歴史や乱歩の位置づけが一般的に示されたと言えるだろう。

【六】平凡社の戦略

それではこの様な博文館の全集に対し、平凡社の採択した方法はどうの様なものであつたのであろうか。六月一〇日の広告を見ると「平凡社版が一番よく売れると書店で評判／何故か？」として次の三点が挙げられている。(1)「作品本意が読者に受けてるのだ!」、(2)「申込金なしで買ひ易いからだ!」、(3)「月一回一冊配本といふのもプロには受ける!」。この内、(1)は内容面、(2)、(3)は経済的側面だが、これらを見るといかにも博文館のものと対照的だということが見て取れる。例えば(1)に関しては、博文館が史的編纂という理念により一作家一冊という構成であつたのに対して、平凡

社の場合はコナン・ドイルに二〇巻中の六冊を充てているのを筆頭に、一人で二冊以上あてられた作家が六人もいる。また平凡社の全集のタイトルは、「ホルムスの冒険」、「オペラ座の怪」という様に、作品名が用いられている。一方の博文館が「ドイル集」、「ルルウ集」と作家名を使っているのと比べると、明らかに作家より作品名の著名度を優先していることがわかる。実際六月一日の広告では「コナン・ドイルの傑作ホルムズもの全部を網羅し、ウオーレス、フリーマン、パンダイン等、世界的名声を有する第一流諸大家のものは各二冊を加へ、総て作品本位の最も特色ある編集ぶり！」と明言している。更に作品の重視ということは、広告の文字の大きさからも窺える。平凡社版全集の広告では、文字の大きさが作品タイトル名、訳者名、作家名という順になっているのである。

また(2)に関しては、博文館や他の全集が一冊分の五〇銭を最初に予約金として納めさせているのに対し、「申込金なし」とし、(3)についても他が毎月二冊配本で一円かかるのに対して、「月一回一冊配本といふのもプロには受ける！」として、経済的に有利な面打ち出している。こういった方法は、先にも述べたが、これらの全集が「円本」の変種であり、「円本」よりも廉価なものを、という要請から発生した企画だったからである。そして平凡社の広告を時間順に追つてゆくと、当初は全集の内容に言及していた広告文句が、日を追うごとに(2)、(3)の経済的要素の方へと、強調されていくことがわかる。例えば予約期間の初めの方にあたる五月一日では「探偵興味時代来る！」という見出しで、「探偵小説は科学的知識と芸術的価値とスポーツの興味を併せ有する現代随一の読物だ。本全

集は一流作家の世界的代表作を悉く網羅する探偵小説の一大集成だ。翻訳探偵もの、定本だ。」という宣伝文が載る。ここで、読者が関心を持つように宣伝されているのは探偵小説というジャンルに対してである。或いは次の五月二三日でも「魅力!! 妖魔の活躍!! 怪奇の乱舞!!」、続く六月四日も第一回配本の「チャリングクロス事件」のストーリー紹介にスペースが取られている。すなわちここまででは内容を宣伝材料の一つとしていたのである。だがやがて経済的特典の方が強調される様になってゆく。「申込金不要/毎月五十銭」が黒抜き文字で記され(六月二日)、またその後も「申込金不要」「先づ五十銭を投ぜよ!」が右端に太字で書かれ、目立つ形になっている(六月三〇日)。そしてそれに比べて作品自体の紹介は、作品名や著訳者名のみで、話の筋に関するものは見付けられない。予約締切日である七月五日を見ると、「即刻!」「本日〆切」という太字の大見出しが目立ち、広告文を見ても「申込金ナシですから、最寄の書店へたゞ五十銭だけお持ちになれば、何の手数もなく右から左へ実物がお手に渡ります。」という経済的特典ばかりである。内容については、僅かに三回分の配本の作品名、作者名、訳者名が載っているだけであり、しかもそれは広告の中で最も小さなポイントによるもので非常に目立ちにくい。むしろそれを囲む「本日〆切」「申込金不要」「二冊50銭」といった太文字、黒抜き文字を却つて目立たせる様にさえ映る。そして内容よりもむしろ経済的利点を大いに売出し、購買意欲をそそるといった広告の仕方からは、商品としての本という、円本に特徴的な一側面を強く見出すことが出来る。

【七】両全集の作家と作品

以上に見てきた様な、博文館と平凡社の対照的な売り方からは、両者或いは他の全集が、お互いに対抗し、競合しているといった感じを受ける。だが果たして容易にそう決めつけてしまえるのだろうか。次に二つの全集について、実際の収録作品の中身を見てみたい。

二つの全集に収められている収録作家の数は、博文館は三二人、一方の平凡社は一三人であり、このうち両者に共通する作家数は二人である。すなわち平凡社の収録作家のうち、博文館を選んでいないのは一人だけということになる。このことから、やはり各全集が独立して企画し、重なつた様に思える。ではその共通する作家において、作品までも同一のものはどのくらいあるのだろうか。それを次に記載する。なお（ ）内はそれぞれの全集に収められている作品数である。

コナン・ドイル	長篇一（博…長篇二）	平…長篇二、短篇多数
マツカレ	短篇一（博…短篇一七）	平…短篇一五）
ドゥーゼ	長篇一（博…長篇二）	平…長篇二）
チェスタートン	短篇三（博…短篇一二）	平…短篇一二、中篇一）

つまりコナン・ドイルの場合は、博文館版に収録されているのは長篇二作で、平凡社版の方では長篇二作と短篇が多数であり、このうち両者で共通している作品は長篇が一つということになる。一二

人の共通する作家のうち、作品までも共通するのは僅か四人のみである。しかも細かく見てゆくと、長篇では、コナン・ドイルの場合には、そもそもシャーロック・ホームズものの長篇は四作しか書かれていないので、両者とも一冊に長篇を二作収めていたならば、一つ以上重なる確率は非常に高いのである。実際両者に重なっている「バスカヴィル家の犬」はホームズものの長篇の内のみならず、ホームズ作品全般、或いは探偵小説ジャンル全般において、現在に至るまで常に人気の高い作品であり、それゆえここで重なつたことも単なる偶然とは言いい切れない。或いはドゥーゼなどを見ても、基本的に円本は既に発表された作品の再録である場合が殆どであり、そうであるならば、もともと翻訳された作品自体が少ないので、重なる確率が高いのもまた不思議なこととは言えない。短篇においてはマツカレの場合、博文館が一七、平凡社が一五の作品を収めている中で共通する作品は僅か一つであり、チェスタートンもそれぞれ一二のうち三つだけである。特にチェスタートンなどはこの時期まだ作家活動を行っており、それ故発表されている作品も限られていた。その様な状況を鑑みてみると、これ程作家が重なっているにもかかわらず、同一の作品が僅かこれだけの少なさという事態は、単なる偶然と見ることは難しい。寧ろ二つの全集において作品選定の住み分けがなされていたと考える方が自然ではないだろうか。その判断材料として、次に翻訳文の問題について見てゆく。

平凡社の六月四日の広告では「各巻何れも世界的名篇!! 訳者は斯界の権威揃ひ!!」と大きく宣伝されている。確かに広告の訳者名を見ると、乱歩、横溝正史、小酒井不木など探偵小説を牽引的に引つ

張っていた名前を見付けることが出来る。だが先に見た見た乱歩や中島の述懐によると、平凡社の翻訳は著名人の名前を貸しただけで、実際は下請けの代訳者を起用していたことになる。では実状はどうだったのであろうか。ここで先に挙げたチェスタートン、マツカレーという両社の全集に共通する作家の作品を、雑誌『新青年』も比較させつつ見てゆきたい。

まずチェスタートンの場合だが、『新青年』責任編集の博文館版全集は第一七巻「チェスタートン集」として昭和五年五月に浅野玄府が翻訳担当となり出版されている。この中に収められているのは一二の短篇だが、その三分の二にあたる八作品はすでにそれ以前に『新青年』上に記載されていることがわかる。しかもその八作中少なくとも五作を訳している浅野玄府は（残りの三作については訳者名の記載なし）、全集の翻訳担当でもあるのだが、『新青年』と全集とで翻訳が一致するものは僅かに「法官邸の広間鏡」一つだけである。つまりここからは、全集刊行に際して雑誌そのままの訳ではなく、新たに手が入れられていることが窺える。例えば『新青年』大正一四年一月号に掲載された「ひねくれた形」（全集版は「邪悪な形」）の冒頭は、「ロンドンから北へ向ふ幾筋かの大道は、グツと深く田舎へはひる迄、家並のひどい途絶え目を行く手に次々にと見せながらも、恰度消えんとして消えやらぬ幽霊のやうに、町並とも角つゞいてゐる。」となっており、一方の全集版では「ロンドンから北へ向ふ大道のうちの或るものは、遠く田園の方へ踏入るまで、幻のやうに家並があらはれたり消えたりしながら、容易に街通りの俤をうしなはない。」となっている。全集では雑誌版に比べて文語調が減つて

いるが、これは全集刊行にあたって、対象とする読者層が雑誌に比べより大衆的になったと意識されていたのかもしれない。なお唯一翻訳文の重複している「法官邸の広間鏡」の場合、この作品が『新青年』誌上に記載されたのが昭和五年の新春増刊号であり、同じ年の五月には全集版「チェスタートン集」が配本されている。時間的に非常に近接していることから、訳し直す必要がなかったのだと思われる（もしくは単に訳し直す時間的余裕がなかったのかかもしれない）。この様に、旧来円本は商品的側面が強調されたため、内容的に拙劣という印象が強かったが、ことこの博文館の全集に関してはそうとばかりも言えないのである。

では次にマツカレーの「地下鉄サム」シリーズを例に取り、ここでは博文館と平凡社の両者のものを比較してみたい。この「地下鉄サム」シリーズは『新青年』上で人気を博し、多数訳載されていた。まず博文館版全集第二巻「マツカリ集」は、坂本義雄を訳担当者として昭和四年七月に刊行されたが、収録された一七篇のうち二篇が『新青年』上でそれまでに既に訳された作品であり、そしてそのいずれもが『新青年』誌上の坂本訳と同一であることがわかる。また残りの未訳の五篇についても、訳担当者が坂本となっているので彼により訳し下ろされたものであろうと推測される。一方平凡社の方は、第七巻「地下鉄サム」として横溝正史が訳担当となり、昭和四年八月に刊行された。これを見ると、全集に収められた一五篇の作品の中で、八作品はそれ以前に『新青年』に訳載されたことがある作品である。そして奇妙なことに、その内の半数にあたる四作は『新青年』誌上の訳と平凡社の全集の訳とが共通するのである。

しかも訳者を見ると、共通する四作のうち三作を横溝正史が行っているものであり、またこの横溝は平凡社のマッカレー作品の翻訳担当者に当たっているのである。一方平凡社版全集と『新青年』とに共通する八作のうちで、訳文が異なっている四作品を見ると、いずれも『新青年』では坂本が訳していた。そして先述した様にこの坂本は博文館全集の翻訳担当である。これらのことを考えると、次の様なことがわかる。すなわち博文館の雑誌である『新青年』上に訳された作品のうち、坂本義雄が訳したものは博文館版『世界探偵小説全集』に収録され、横溝正史が訳したものは横溝が担当する平凡社版『世界探偵小説全集』に収録されたことである。つまり平凡社版のマッカレーの半分は『新青年』に訳載されたものということとなる。これでは両社の訳文に優劣を下すことは出来ず、またここからは、博文館と平凡社の決して対立のみには還元出来ない関係が浮かび上がってくる。付言すれば平凡社の翻訳担当である横溝は、この時期以前に博文館の『新青年』の編集長として一時代を築いていたのである。

また平凡社版全集の訳者として名前を挙げられている一五人のうち、博文館と重なっている人物は江戸川乱歩、延原謙、横溝正史、小酒井不木、田中早苗、平林初之輔の六人であるが、これらの全てが『新青年』上において探偵小説の指導的立場にいた人物である。またこの六人の内、二つの全集で作家と訳者が共通するものはコン・ドイルの延原謙、ドゥーゼの小酒井不木、ヴァン・ダインの平林初之輔であるが、この三人はいずれも『新青年』で作品を積極的に翻訳していた人物である。特に平林初之輔に着目すると、ヴァン・

ダインの訳について、初めて日本で翻訳されたのが昭和四年の六月号から九月号にかけての『グリーン家の惨劇』であった。この作品は同年一〇月には早くも博文館から『世界探偵小説全集』の一冊として刊行されているが、平凡社の方でも翌年一月と一二月にやはり平林初之輔名義で「カナリヤ殺人事件」、「ペンシン殺人事件」が訳されているのである。『新青年』や博文館版全集に収められた「グリーン家」が本国のアメリカで発表されたのが前年の昭和三年であり、それはヴァン・ダインの三作目であった。つまり平凡社は「グリーン家」以前のヴァン・ダイン作品二作を訳したのであり、アメリカ本国と殆どタイムラグなしに紹介されたと言える。この様な事態は全集作家の中でも特異なのであるが、この作品と訳者の選定もやはり、『新青年』誌でのヴァン・ダインの扱いに影響を受けたと見ることが出来る。

こうして見てゆくと、平凡社が喧伝する「斯界の権威」の訳者とはいずれも、実は『新青年』と深い繋がりを持っていることがわかる。つまり平凡社の言う「権威」とは博文館の『新青年』に拠るところが大きいのである。この様に共通する訳者・作家・関係者、重ならない作品という状況を見ると、博文館と平凡社の両社の繋がりが、平凡社の『新青年』への依拠といった面が見えてくる。

また先に引用した様に、中島は博文館版を替める理由の一つとして唯一の解説つきという点を挙げている。この点に関しては確かに博文館の広告で「各冊、作者並にその作品に関する懇切なる評伝を附したる点に於て、欧米にも先例なき」と述べられている。だが一方平凡社の全集を閲覧してみると、確かに博文館の様に、本の最後に

訳者による解説を付けるということはなされていない。だが、その代わりに月報が付けられ、そこでは博文館と同じく作家の紹介がなされているのである。またヴァン・ダインに関しては、平凡社版では「カナリヤ殺人事件」「ペンペン殺人事件」に登場人物一覧表を付すというを行っているが、一方博文館ではヴァン・ダイン「グリイン家惨殺事件」にはこの様なサービスはない。博文館の「グリイン家」が『新青年』で記載された時には毎回、登場人物表が付けられていたにもかかわらずである。そのことを考えると、中島が言う様に博文館の質が高くサービスも細やかで、一方の平凡社は拙劣で劣るものだったと一概には言い切ることが出来ない。そもそも先に例示した様に、平凡社の訳には、博文館の『新青年』上で翻訳された作品が使用されている場合もあったのである。その様な状況は、博文館と平凡社という対立構造を崩してしまうものであり、当然両者に単純な優劣をつけることなども無意味となってしまうものである。但し繰り返し述べておきたいのは、平凡社版の作品選定が『新青年』イデオロギーに影響されているということである。

【八】探偵小説の流行

ここまで見てきて、両社の全集収録作品の内実から次の様なことがわかる。すなわち各々の全集において、差異はあったが、それは対立ではなくむしろ住み分けの性格が強く、出版社毎の独立というよりは共存という方が近いことである。共存関係は二社だけではない。江戸川乱歩や小酒井不木、森下雨村など、『新青年』と縁

が深く、屋台骨を支えていたような人物の名が、博文館はおろか、平凡社、春陽堂、改造社版全集の編者、訳者、収録作家として含まれていることはそのことを裏打ちしている。これらの全集の売れ行きに関しては具体的なデータがなくはつきりと示すことが出来ないものの、乱歩の言によると最盛期で各種「二冊二、三万」部程で「各社のものを合計すれば、初めの方の配本では、毎月二十万冊以上」¹⁷⁾もが刊行されたということである。ここで注意すべきことは、こういった協力状態により、広告を数多く載せることで、円本ブームによる探偵小説ジャンルのバブルを作り上げたという点である。

円本全集の「合戦」によって引き起こされた、探偵小説の流行という状況は、この時期の『朝日新聞』上の広告からも看取出来る。広告合戦最終日である七月五日の翌日六日には、次の新作新聞小説として、甲賀三郎の『幽霊犯人』の紹介がなされており、そこには「続いて掲載されるのは近時の読書界に異常な流行をなして居る探偵小説であります。」と書かれている。また探偵小説全集が新聞紙上を賑わせていた六月二三日には『文学時代』七月号の広告が載るが、この号では特集として「探偵小説号」が組まれる。この雑誌は新潮社によってこの年刊行された文芸雑誌だが、この「探偵小説号」の編集後記では「探偵小説は目下非常な流行です。それは、探偵小説の全集が、一度に三つ四つも出たといふ事でもわかります。そこで、本号も、此の特輯としたのですが、最も時宜を得たる企てとしてかならず諸君の歓迎を得る事と思います。」と書かれている。この様にこの時期探偵小説は、同時に複数の「探偵小説全集」が出版されたことを大きな要因として、「異常な流行をなして居る」「最も時宜を

得たる企て」として、全集出版社以外からも捉えられていたのである。

以上これまで見た様に、この全集ラッシュは、一見出版社同士が競合している様に見えつつも、出版社それぞれが独自に企画し偶々同時期に競合したのではなく、実情は共闘を前提とした共存であり、むしろある程度限られた数名の探偵小説関係者による、複数の出版社に跨った共同作業であった¹⁸。尤もこの様な状況を、探偵小説というジャンルにかかわる人間が少数なので同じ人々で行うしかなかったと見ることも出来るかもしれない。だが例えそうであったとしても、ここで重要なのは、こういった共同作業により、探偵小説というジャンルの普及、活性化に寄与することになったということである。そしてその結果江戸川乱歩が「私の探偵作家生活三十年の間に、こんなに探偵本が出版され、売行きの点でも好成績を収めたことは、あとにも先にも例のないことであった」という様な活況を呈したのである。

(1) 「各国の廉価版の傾向」(法学博士福田徳三)、「全国民は坐右に一本を」(子爵後藤新平)、「文芸の普及」(徳田秋声)、「余りに立派」(久米正雄)の四つの推薦文である。

(2) この点に関しては拙論「一寸法師」のスキャンダル——乱歩と新聞小説——(『国語国文研究』第一二二号、平一四・七)を参照されたい。

(3) 永嶺重敏『モダン都市の読書空間』(日本エディタースクール出版部、平一三・三)第四章「円本ブームと読者」

(4) 「ルパン全集」の広告では必ず「怪奇探偵」という大見出しが「ルパン全集」の前に付帯されている。「小酒井不木全集」の場合も常に「日本探偵小説全集」とセットで広告され、宣伝文では「閻魔文学の鬼品!! 科学的探偵小説の権威!!」と書かれ、また第一回の配本には「探偵小説短篇集」があげられるなど、探偵小説を売りしているのが看取される。なお不木は戦前『新青年』を中心に探偵小説や犯罪関連の評論、随筆、創作などを多数発表し江戸川乱歩も兄事していた人物であるが、全集出版の背景には刊行の前月に死去したという事情がある。すなわち個人の日本人作家による探偵小説全集として最初のものであるこの全集は、急遽作られた遺稿集という性格を持っていた。

(5) 各全集の、新聞での広告開始とそれぞれの予約期間は以下の様になっている。博文館「世界探偵小説全集」、五月一日〜六月三〇日。平凡社「世界探偵小説全集」、五月一六日〜七月五日。改造社「小酒井不木全集」、「日本探偵小説全集」、五月二三日〜六月二五日。春陽堂「探偵小説全集」、五月二三日〜七月五日。すなわち五月二三日から六月二五日の約一ヶ月間は、四社五種の全集の公告、予約期間となっている。なお「ルパン全集」の予約締切は四月三〇日で、広告掲載も三月から四月にかけてであり、他の全集と重なっていない。

(6) 江戸川乱歩『探偵小説四十年 覆刻』(沖積舎、平元・一〇)、昭和四年の項

(7) 江戸川乱歩『探偵小説四十年 覆刻』(前掲)

(8) 中島河太郎『日本推理小説史』第二巻(東京創元社、平六・

一一 第二十章「全集合戦」

(9) この号の広告では乱歩の『孤島の鬼』が太字の大見出しで宣伝されている。朝日は昭和四年に博文館が創刊した大衆雑誌『キング』など講談社系の大衆雑誌の流行に対抗する形で刊行されたが、数年で廃刊となった。

(10) 江戸川乱歩『探偵小説四十年 覆刻』(前掲)

(11) 全二四巻のうち一巻から七巻までが日本人作家八名、八巻以降が海外の作家という構成になっている。

(12) 中島河太郎『日本推理小説史 第二巻 (前掲)』

(13) 江戸川乱歩『探偵小説四十年 覆刻』(前掲)、これによると乱歩自身も直木に翻訳を依頼されたが、時間がなかったため名前だけを貸し、友人にやらせたということである。

(14) この意識とは対抗意識でありつつも共存意識でもある。どれか一つを買うという場合は、経営的、出版社的にはもちろん自社の特集を買ってほしいが、作品の中身が重なっていないために、例え複数買ってもあまり損をしない。実際内容見本を配っているのだから、探偵小説ファンが複数の全集の見本を取り寄せてみればそのことはわかる。

(15) 更に『新青年』翌月号でも、全集版に掲載された「探偵作家楽屋ばなし」の続きの部分に関して、誤植があったという訂正を乗せている。そこでは「横溝君や、後の阿武野丸氏や云々」と書くべきところが、「横溝後の阿武野丸氏や云々」と誤植されたため、本来なら別人である二人が同一人物であるかの様に誤認される様な結果をもたらしたという、探偵小説の関心を惹く

ような出来事が起きたことが述べられている。

(16) 例えば馬場孤蝶は「探偵小説が世に迎へられるのは結構であるが、探偵小説の歴史も変遷も知らずに、作家の選定杜撰を極めその上宜い加減な□(一字判読不能)訳を以てせられては、原作者にも気の毒だが、第一読者を愚弄するもので折角向上しつゝある日本探偵小説壇の為に甚だ遺憾である。尤も新青年編集のものは森下君なり延原君なりが控えてゐるから、十分の信頼がおけると思ふ」と述べており、それ以外にも「探偵小説全集が方々から出るやうだが、何といつても探偵小説では『新青年』編輯即ち博文館が総本家である」(加藤武雄)、「作家の顔触といひ一転申分ない流石は新青年編輯部の責任編輯だけあると敬服する」(長谷川天濤)などといった言葉が散見される。

(17) 江戸川乱歩『探偵小説四十年 覆刻』(前掲)

(18) この点で円本の中でも、企画の重なりや出版権の問題などで対立を引き起こした全集とは性質が異なる。競合ではなく共闘態勢が可能であったことの要因の一つとして、両社の作品内容が海外翻訳ものだったということが考えられる。すなわち著作権等に関しては、例えばこの時期は翻訳権十年留保として、原作が公刊され十年以内に翻訳が行われていない場合は権利者の許可なく自由に出版できた。また日米間の翻訳は自由となっており、それは原典の出版を問わず英文のもの全てに適用された。すなわち原典がどの言語であれ英訳されたものであれば自由に日本語に翻訳出来たのであり、こういった当時の著作権事情が関係していると思われる。この点は今後の課題としたい。(参照

宮田昇『新・翻訳出版事情』日本エディタースクール出版部、
平七・七)

(19) 江戸川乱歩『探偵小説四十年 覆刻』(前掲)。この年に江戸川乱歩は『孤島の鬼』、『蜘蛛男』という二つの長篇を発表している。前者は博文館の『朝日』、後者は講談社の『講談倶楽部』に掲載されたが、両雑誌はともに、『キング』に代表されるような大衆を讀者層として狙った雑誌であった。『孤島の鬼』は乱歩自身「売文主義の皮切りとなった」とし、『蜘蛛男』は「老若男女だれにも歡迎されるような」講談社ものの第一作である。この様に、この昭和四(一九二九)年は探偵小説がより大衆向けになったという点で強調されるべきであり、探偵小説のそれまで一〇年間の総括という性格が強い。

(なりた だいすけ・北海道大学大学院博士課程)